



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	牧場報告特集号の発行にあたって
Author(s)	大久保, 正彦
Citation	北海道大学農学部牧場研究報告, 17, 1-1
Issue Date	2000-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/48957
Type	other
File Information	17_1.pdf



牧場報告特集号の発行にあたって

21世紀は、地球レベルで食料生産と環境との調和が鋭く問われる世紀といわれている。人口は21世紀半ばには100億近くにも達するといわれ、その食料をいかに確保するかは、我々に与えられた重大な課題である。同時に、資源の枯渇や環境悪化についても、マスコミに登場しない日はないほど事態は深刻になっている。こうしたなかで、一方では人間の食料でもある穀物を、草食家畜である牛に多量に与えて乳や肉を生産することが、きわめて当然のように行われている。他方、中山間地では耕作放棄地が増加し、かつては林内放牧などもふくめて多様な利用がみられた森林でも利用度が低下している。全ては短視眼的な生産効率至上主義のなすところといえよう。しかし、いつまでそれが続けられるのか。

北海道大学農学部附属牧場は、傾斜地と排水不良の沢地が多い、決して自然に恵まれたとはいえない立地条件のもとで出発した牧場であった。当初は馬が中心で、のちに肉牛が導入され、教育・研究が展開されてきた。時まさに高度経済成長期で、畜産も輸入飼料に依存した大規模化・集約化路線を突き進んでいた。そのなかで、先人たちの選んだ道は、決して時流に流されず、その立地条件を活かした畜産を確立しようとするものであった。換言すれば、畜産の原点にたつと同時に、時代の将来を展望した生態系調和型の畜産のあり方を1960年代から目指していたのである。代々の牧場長をはじめ、関係者の慧眼に敬意を表さずにはおられない。

現農学部草地畜産学研究室小竹森訓央教授を中心に、1965年から現在まで35年間にわたって進めてきた「粗飼料主体の牛肉生産に関する研究」はその中核になるものであった。蹄耕法による草地造成に始まり、乳用雄子牛やヘレフォード種肉牛を対象とし、放牧やサイレージ・乾草を最大限に活用した育成・肥育、そして生産された牛肉の消費者による評価まで、まさに土地から食卓までを結んだ類のない体系的な研究といえよう。「霜降り優先のなかで、草から生産された牛肉は、市場や研究者からも酷評され、買いたたかれ続けた」と小竹森教授は語る。しかし時代は転換しつつある。前述のように、食料生産と環境との調和が問われている今日、本牧場における小竹森教授らの研究は、濃厚飼料主体で発展してきた日本の肉牛生産のあり方に対する根本的な批判をこめた実証的研究として、再評価されなければならない。

本特集号は、小竹森訓央教授が本年3月をもって停年退職される機会に、牧場における研究を中心に粗飼料主体の牛肉生産に関する研究をまとめておきたいと考え、企画したものである。今後の牛肉生産を考えるうえで、さらに農業と農学のあり方全体をも考えるうえで、本特集号がいささかでも貢献できれば幸いである。最後に、本特集号の発行にあたってご多忙のなか執筆の労をとられた皆様に、心から感謝の意を表するものである。

2000年3月

牧場長 大久保正彦